

しゅう
しゅう
う
あめ
き
っ
な
蕭々たる、喫茶する……。

しゅう
や
り
ふ
か
ふ

彼はただ端座していた。

書院造である。

青い畳はイグサ独特の、渋みを帯びた清涼な香りを仄かに薫^{かお}らせていた。水滴が杉の葉を、飛石を、打つ。柔らかい音、蕭々と雨が降っていた。蹲踞^{つんく}を濡らし、外の縁側（落ち縁）を濡らしているに違いない。濡れ縁とはよく言ったものである。

内側の、畳敷きの廊下「入り側」を涉り、敷居を越えて、湿った土やら、苔の匂いやらが忍び込んでいた。樹木の芳しさを微かにまとっている。

鴨居の上には、欄間があつたが、檐^{ひさし}が深いために、鬱々として暗かった。

入り側から、障子を透してほのかな明かりを取る書院窓の下、作り付けの文机の上に、古き筆と硯、古色に燦ふる陶磁の水入れに龍の鑄物の文鎮、四角い墨には型押しで金泥の龍。

そのすぐ隣は、床框で立ち上げられ、一段高くなつた畳床の空間「床の間」で、掛軸が掛けてあつた。

その左、床柱で仕切られた向こうには、襖に濃彩の描かれた天袋、その下に磁器など飾られた違い棚、その下で常滑の壺が冥陰に隠れて静まり返っている。

じつと坐っているうちに、時間から取り残され、底知れない永遠の深淵に落とし込まれてしまったような錯覚を覚えた。

天袋と違い棚の障壁と北側の襖とは一連の濃彩で、青味を帯びた暗緑の太松、あでやかな椿黄金のススキに紅葉の楓、桜花爛漫に散る華吹雪、すべてが精緻に描きこまれ、象りのいちいちを捉えるには数時間を費やすであらう。だがそれは鮮やかというよりは暗がりに陰にひそみ、いぶし銀のごとく鈍く光る類の沈鬱な綺羅びやかさであつた。

床の間には一輪挿しがあり、深い紫の菖蒲が一輪、黙して辞儀をしていた。その上の掛軸を見るともなく、見る。大胆な没骨法^{もつこく}で、墨痕の濃淡のみの山水画だつた。

部屋全体が幽玄である。陰翳のなかで現実感が朦朧とし、昏い玄妙な世界に引き込まれるかのように覚えた。

一輪挿しは、恐らくは遠く南の国にあつた頃は、水差しのような生活の雑器だつたのだろう。何ら飾りも素っ気もなく、ほとんど素焼きに近くて、よく焼しめた上に、薄つすらと釉薬が三分の二ほどの面積に塗られている。無言だ。無表情で、何の作為もない。どこにでもある、何でもないもの、路傍の石ころにも均しい。

まさしく凍えている。冷えているな、そう思った。

「支度ができました。さ、どうぞ」

当主に導かれて、露地の飛石を踏んで涉り、数寄屋造りの小さな建物の、躍り口から体を屈めて入る。

採光は、紙障子を透かして入る蒼褪めたような光のみ。

炭斗から炭を出だし、風炉に火を熾した。茶釜に湯を沸かす。蟻腰の見掛を持った竹筥（茶杓）を手に取り、肩付きで、緋襷の入った茶壺から茶をすくい、茶碗に入れた。その優しく丁寧なしぐさが耳かきのような官能的な快感を覚えさせる。

湯を注いだ。

「どうぞ」

茶碗は書院造の部屋にあった一輪挿しと同じく素朴で、釉薬こそまんべんなくかけてはいたが、つやつやせず、色濃くはあっても、素焼きのような、自然なものだった。彼は鮮やかな抹茶の緑と対照的な土味を眺める。

当主は言った。

「師は黒が好きでした。何もかもを塗りつぶしたかのように真つ黒で、どうしようもなく無地なものが好きでした。幽玄に、底なしにすべてを吸い込むような無地の。」

しかし」

当主は口を閉さす。彼は言葉を待った。

「私にはむしろそれがあざとく見えました。これ見よがしに、冷えている、凍えていると言わんばかりで。」

まあ、私の手も同じかもしれませんが。裏の裏をかいているだけなのかもしれません」
微笑する。

「思考に涯はありませんから」

彼はそう言つて、茶を啜った。寂莫たる静謐の薄暗がり、蕭々たる雨が沁み入る。茶の緑の味と入り混じる。清かに広がる。

閑